

モハメド・アリの生涯とその「遺産」

Life and Legacy of Muhammad Ali

藤永康政

FUJINAGA Yasumasa

はじめに

2016年6月3日、モハメド・アリが、アリゾナ州スコッツデールの病院で死去した。享年74である。彼の葬儀は、故郷のケンタッキー州ルイヴィルにある大規模複合施設ケンタッキー・エキスポ・センターを会場とし、6月9日木曜日、スンナ派イスラームの儀礼を踏襲したメモリアル・サービスに始まり、翌日の午前、同市の黒人コミュニティを通り抜ける葬送パレード（アリの亡骸を乗せた車両に沿道に並ぶ夥しい数の人びとが花束を手向けた）、さらにその日の午後、約2万2千人を収容するアリーナを会場とした特定の宗教・宗派に拠らない告別式へと続く、きわめて大規模なものであった。この壮大な別れの儀式は、パーキンソニズムと闘いながら、およそ10年かけてアリ自身が「終活」して計画されたものだった。最終日の告別式では、親族に続き、マルコムXの娘アタラ・シャバーズやビル・クリントンが弔辞を述べたのだが、これもアリ本人の人選だったという。興味深いことに、カシアス・クレイ／モハメド・アリの生涯の重要な何かを象徴するかのよう、彼の墓碑銘には、彼のトレードマークである大仰な言葉はなく、モハメド・アリという名前が記されているだけだという¹。

多くの人びとから愛され、それと同時にまた多くの人びとから憎まれた「偉人」の実像に迫るのはもとより困難である。「アリ」とは、愛憎の両義性を「黒い身体」のなかに凝縮した人物だったからなおさらのことである。このことに関わって、ニューヨーク・タイムズ紙専属のスポーツライターとしてクレイ／アリと親しかったロバート・リップサイトは、訃報としては例外的に長い記事のなかで、こう記している²。

アリは、かつてスポーツ界に存在した人物のなかでも、最も激しい論争を呼んだスーパースターであった——1960年代と70年代、彼の宗教的・政治的・社会的なスタンスが原因で、賛嘆と中傷を同時に集めて。ベトナム戦争での徴兵を拒否したこと、公民権運動の只中であって人種統合を否定したこと、キリスト教からイスラーム教へ改宗したこと、「奴隷名」のカシアス・クレイからネイション・オヴ・イスラーム（彼が入会した黒人分離主義のセクト）が授けたものへ改名したこと、これらは、保守的エスタブリッシュメントからは深刻な脅威だと、そして、そのリベラルな対抗勢力からは叛逆的精神を示す高潔な行為だと考えられた。

愛され、憎まれ、彼は、この50年間、この地球に存在する最も目立った人物のひとりであり続けた。

だが、その晩年、アリは、俗世に生きる聖人のような何者か、軟焦点で浮かび上がる伝説になっていった。リングから追い出されたあとには、ボクサーとして最良の時期の3年余の時間、反戦という正義のために数百万ドルにのぼる私財を犠牲に供したとして、尊敬されるようになった。不治の病に直面しながらも、人目を気にしようともせず勇敢に振る舞っているとして絶賛された。公の場で示す妥協を知らない優しさが敬愛を集めるようになったのである³。

クレイ／アリの生涯、それは、「波瀾万丈」というと陳腐に聞こえるほど、その評価がひとつの極からまた別の極へときわめて激しく跳び動いたものであった。それは、彼の往年のリング・スタイル——蝶のように舞い、蜂のように刺す——のようである。

では、この世を去ったことがかくも大きな出来事として捉えられた「歴史的人物」、カシアス・クレイ／モハメド・アリをわれわれはどう理解すればいいのだろうか。ある時代には、その時代を象徴する人物が何人かいる。アメリカ独立革命にとってのジョージ・ワシントン、大恐慌にとってのフランクリン・D・ローズヴェルトがそうであったように、20世紀の後半はアリの時代であった、そう述べるのは、アリの告別式で最初に弔辞を述べたルイヴィルのキリスト教会の牧師、ケヴィン・コスビーである。こう評されたとしても、それをアリ当人に親しい者による誇張された評価だと片づけるわけにはいかないであろう。この筆者の直観が正しいとすれば、アリの「実像」を捉まえることが不可能だとしても、この「グレートな男」の来歴を当時の文脈に即して辿ることを通じ、20世紀後半から21世紀にかけてのアメリカ

社会を浮かびあがらせることは可能ではないだろうか。本稿は、同時代的な文脈のなかでモハメド・アリ（カシアス・クレイ）の来歴を確認しながら、可能な限り「実像」へ接近し、この自称「グレートな男」がわれわれに何を残したのかを、主にはブラック・パワー運動との関連のなかで考察する試みである。

1. クレイの「奇妙な来歴」

クレイ／アリの生涯については、トニ・モリソンが編集に加わった自伝 *The Greatest* をはじめに、すでに多くが著されている。そのようななか、屋下に屋を架すに等しいことかもしれないが、同時代に起きた出来事にも適宜言及しながら、彼の来歴を整理してみたい。

後のモハメド・アリは、カシアス・マーセラス・クレイ・ジュニアとして、1942年1月17日、看板塗装工を父、家事労働者を母にケンタッキー州ルイヴィルに生まれた。父方の祖先には、アンテバラム期のアメリカの政治家ヘンリー・クレイがいると言われている。周知の通り、カシアスという名前は、その姓とともに、後にアリが使用を拒否するものであるが、その名前は、「奴隷の名」ではなく、ヘンリー・クレイの縁戚に当たるアポリシヨニストの名に由来する。

幼い頃のクレイは、想像に違わず、活発で陽気な少年だったという。その少年カシアスにとっての大きな転機は、1954年10月、彼が12歳のとき、自転車の盗難被害にあった際に訪れる。誰が盗んだのかを知っていたクレイは、犯人を見つけたら殴ってやると周囲に届く大声で叫んでいたらしい。そのとき、偶然現場に居合わせ、クレイの言葉を聞いた警官のジョー・マーティン（白人）は、彼が運営しているボクシング・ジムでのトレーニングを持ちかけた。若い怒りは運動で発散せよ、分別ある大人からの進言である。

少年クレイは、どうやら勉学の方はさっぱりだったようだ——リップサイトによると、学年391人中の成績順位は376番だった。しかし、この「やんちゃな少年」は、マーティンが奨めたボクシングのリングのなかですぐさま頭角を現していった。トレーニングを始めて6週間後、地元のアマチュアの

試合でデビューを果たすと順調にアマチュア・ボクシングの階梯を駆け上がり、ゴールデン・グローヴ・トーナメント（1928年に始まったアマチュア選手権）で6回の州チャンピオン、2回の全国チャンピオンに輝いた。そして、1960年にはローマ・オリンピックのライト・ヘヴィ級アメリカ代表選手に選拔され、金メダルを獲得する。

奇しくもクレイがリングデビューを果たした年は、公立学校での人種隔離を違憲としたブラウン判決が下された年でもある。彼がアマチュア王座への階梯を順調に昇っていたときには、1955年から56年にかけてのモントゴメリー・バス・ボイコット運動、1957年のリトル・ロック事件が立て続けに起き、アメリカの「人種問題」は広く国際的な関心を集める事態となっていた。8月末に始まったローマ五輪のおよそ半年前には、人種隔離されたランチカウンターに抗議する座り込み運動がノースカロライナ州グリーンズボロで起き、これがおよそ2カ月のあいだに5万人が参加する大規模な運動に発展すると、公民権運動は、非暴力直接行動という新たな戦略を得て一段と激しさを増していた⁴。

クレイが五輪というひとつの「国際舞台」に立ったのは、このような文脈においてである。この時期、冷戦下の国際社会を舞台に、「人権」の尊重姿勢を武器にアジア・アフリカへの浸透を図っていたのは、今日の共産主義イメージとは異なり、アメリカではなくむしろソヴィエト連邦であった⁵。さまざまな外交的な駆け引きが行われる五輪大会という場において、ソヴィエト代表選手との対戦を前にしたクレイに、同国の記者はアメリカの人種関係について意見を求めた。彼はこう答えたという。「[ソヴィエトの]読者にはこう伝えてくれ。その問題では適任者がしっかり事に当たっている、と。だから、この先どうなるかに何の不安もないね。何だかんだ言っても、あなたの国と較べてみても、USAが世界で一番の国なんだ。たまたま「人種隔離制度のために」飯を食うのに不便なことがある。しかし、泥でできた掘っ立て小屋に住んで、アリゲーターと闘わなくちゃいけないってわけでもないもん」⁶。

ここでクレイは、冷戦を戦うアメリカのアポロジストを自ら買って出るに留まらず、「泥でできた掘っ立て小屋」以下のところでは、アメリカを持ち

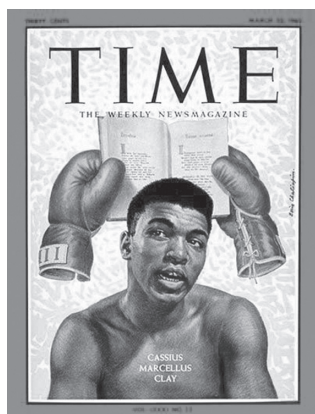
上げるために露骨で植民地主義的な「アフリカ」のイメージに寄りかかっている。それはまるで奴隷貿易と奴隷制に「感謝している」と言っているかのようである。アフリカン・アメリカンの抗議行動が低調だった時代の発言ならばまだしも、このときは、エンターテインメント界のなかの人間をみても、ルイ・アームストロングなどの大物ジャズ・ミュージシャンを筆頭に、公民権問題への政府の不十分な対応を原因として、海外で公演することで政府のプロパガンダに与することを拒否する者も現れ始めていた時代であった⁷。シット・インに加わった学生たちがクレイと同年代の者たちであることを考慮に入れるならば、今日一般的に流布している「アリ・イメージ」はローマでのクレイにはまったく欠如している。

ローマ五輪で金メダルの栄誉に輝き、ルイヴィルに「凱旋」したとき、クレイは、その後のクレイ／アリの特徴になる「大口叩き」を公衆の前に初めて披露する。そのときに彼が読んだ自作の「韻詩」は、驚くことに、“To make America the greatest is my goal” から始まっていた⁸。“I am the Greatest” と、彼が遺した「名言」のひとつにある「偉大さ」とは、当初、自分自身につけられたものでも、黒人一般の誇りを意味するものでもなく、「アメリカ」に付されたものであった⁹。

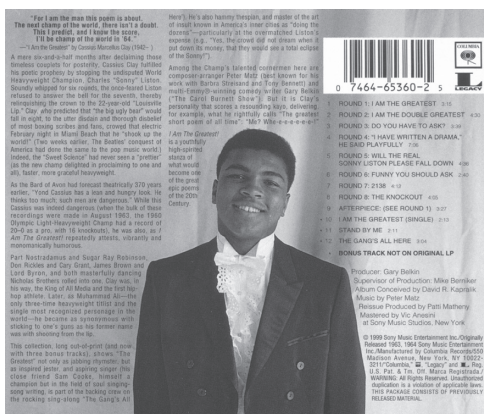
そのクレイは、帰国後すぐに地元ルイヴィルの実業家 11 名が出資した興業会社とプロ契約を結び、プロに転向する。1960 年 10 月 29 日、白人のトニー・ハンセイカーを相手にしたプロデビュー戦で判定勝ちすると、その後、1963 年 6 月までのあいだに 19 連勝を収め、1964 年 2 月 25 日にソニー・リストンとヘヴィ級タイトルマッチが組まれることになった。

この当時のクレイの人気の淵源は、ボクサーとしての才覚よりむしろ、彼の「パーソナリティ」にあった。人好きのする「愉快」な黒人青年は、ヘヴィ級チャンピオンになる以前から全盛期のテレビ・メディアの寵児となり、飛び抜けに面白い語りはやがてコロムビア・レコードから発売されることになった。そのようななか、1963 年 3 月、『タイム』誌は、まだノンタイトルの駆け出しプロボクサーを、表紙に採用するに至る（資料 1）。

資料 2 は、コロムビアから発売されたレコードを復刻した CD の裏面であるが、タキシードを着てカメラに向かってにこやかに笑うその姿は、ファイ



資料 1



資料 2

ターやアクティヴィストのものではない。それは、その後のアリが体現した「レイス・マン (Race Man)」とは反対に、ほら話と機智で人心を和やかにさせる道化、すなわち、白人の脅威になりようのない、ミンストレル的な黒人男性のものである。あきらかに、この時期のクレイの振る舞いは、その後の「アリ」の鏡像である。

2. 「アリの誕生」とブラック・パワー運動

このクレイのイメージは、ソニー・リストンとのタイトルマッチの翌日の記者会見でネイション・オヴ・イスラム (NOI) への入信を發表したとき、「白」と「黒」が反転したものになっていった。クレイがモハメド・アリへ改名したのは、この直後のことだった。

クレイと NOI との関係は、リストンとのタイトルマッチの広報宣伝が活発になった1964年1月頃にはすでに、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』のスクープをきっかけに、広く噂されていたものであり、それにしたがって、この対戦が持つ意味も大きく変化していた。これより以前、組織犯罪との関係も取り沙汰されていたリストンに対し、人好きのする青年クレイは、黒人であろうとも「偉大な白い希望 (Great White Hope)」であった。ところが、当時は「逆人種差別を説くカルト組織」と見なされていた

NOI、わけてもその最も辛辣なスポークスマン、マルコム X との関係が囁かれただけで、クレイのイメージが変わろうとしていた。このときの模様をこの対戦の広報担当だった人物はこう述べている。「クレイ対リストン戦の商業文句は、白い帽子対黒い帽子だった。しかしこうなってしまうては、黒い帽子しかいなくなってしまう」¹⁰。

興味深いことに、この間、クレイ／アリ自身の言動に大きな変化は見られない。NOI に改宗したとしても、ごくわずかの者を除いて白人で占められていたクレイ／アリの「チーム」を黒人だけにしようとした形跡もなければ、「白人」に対して威圧的な態度や、攻撃的な言動を行い始めたという話も伝えられてはいない。だが、NOI 改宗を契機にクレイの身体に「黒さ」が読み込まれ始めたことで、それがもつ意味が変化していったのである。

奇しくもこのときのアメリカでは、公民権運動、ならびに運動が展開するアメリカの政治社会的な環境がひとつの大きな転機を迎えていた。リストン戦が行われた 1964 年 2 月初頭、前年に連邦議会での審議が開始された公民権法案が下院を通過し、議案可決の焦点は上院での審議に移っていた。フィリバスターが可能な上院では、南部選出の議員が連日のように人種的偏見を露骨に語る反対演説を行い、その模様は広く報道されていた。このようなか、北部でもいわゆる「ホワイト・バックラッシュ」が始まることになる。タイトルマッチの前日、カリフォルニア州では、住宅における人種差別の禁止を定めた州条例が財産権に抵触するとして、同条例の廃止を問う住民提案が秋の選挙で行われることが決定されていた。多くは郊外に住む「白人」が、黒人が移住してくるのを嫌ったのだ。また、タイトルマッチの当日、イリノイ州シカゴでは、公立学校の人種隔離に反対した学校ストライキが 17 万 5000 人の参加者を集めるなかで敢行されていた。このシカゴの例にあるように、ホワイト・バックラッシュの初期の徴候が見えようとも、南部公民権運動から強い刺激を受けた北部の黒人たちは、南部流のさまざまな直接行動で、北部流のデファクトな人種隔離を打破しようという動きをはっきりと見せ始めており、もっぱら南部のものだと考えられていた人種問題は確実に北部でも大きな課題となりつつあった¹¹。マルコム X への関心の高まりは、南部・北部を問わず白人の抵抗と黒人の戦闘性双方の強まり、そして高まる人

種間緊張のなかで初期の公民権運動の目標への疑念が芽生えていたことを背景としていたのである。「アリ」は、このときに「誕生」したのだった¹²。

その後、アフリカン・アメリカンの運動は、アメリカ社会に単に「統合」されるのではなく、黒人の人種的な矜持を強調してアメリカの政治文化自体の変化を激しく要求するブラック・パワー運動の興隆を見る。紙幅に限りのあるなか、この多様で複雑な運動それ自体を詳述することはできないが、本稿の目的との関連で、次のことだけを簡単に確認しておきたい¹³。わが国のアメリカ史研究では、ブラック・パワー運動について、分離主義的なその主張がホワイト・バックラッシュの主な原因になり、アメリカ社会の分裂を深めたとする見方が強い。確かに、人種統合を目的とした運動を先頭で牽引した学生非暴力調整委員会や人種平等会議などは、1966年に白人を組織から「追放」する決定を行うなど、分離主義的な傾向を濃厚にしていた。だが、たとえばブラック・パンサー党の活動などは、大義が一致するならば白人との連携は積極的に進めるところに特徴があった。その後のアメリカの多文化主義的な感性の創生をブラック・パワー運動にみることは充分可能であり、これをもっぱらアメリカ社会の分断の原因とみなすのは、運動そのものを検討したというよりも、むしろホワイト・バックラッシュの言説を単になぞっているだけだと言わねばならない¹⁴。

行論をアリの生涯へ戻すと、ベトナム反戦の立場を明確にした後のアリの来歴は、黒人、白人、アジア系、ラティーノス、アメリカ先住民の青年層を中心にわきあがるブラック・パワー的な強い人種意識を反映し、ひとつの巨大なシンボルになっていく。サンフランシスコ・ステイト大学でのエスニック・スタディーズの開設を求めた大規模なストライキ、ハーワード大学での西洋古典中心の教養科目の抜本的刷新とブラック・コンシャスネスを反映したカリキュラムの策定を求めたストライキ、そして1960年代後半から1970年代初頭にかけて全米中のキャンパスで展開された大規模なベトナム反戦運動のなかで、モハメド・アリの姿は、「エスタブリッシュメント」によってチャンピオンベルトが剥奪されたからこそ、まさに「グレート」な「ヘヴィ級チャンピオン」にほかならなかった。そして、その意味は、ブラック・パワーとスチューデント・パワーを背景に、また新たな政治的な意味を賦活されて

いったのである¹⁵。

1967年のハーワード大学ストライキの現場を訪れたアリは、同大学の中庭を満杯にした群衆の前に、NOI信者にとって最も重要な書のひとつであるイライジャ・モハメドの『アメリカの黒人男性へのメッセージ *Message to the Blackman in America*』を手にし、NOI流の世界観にアリ一流の機智を織り込みながら、こう述べている。

われわれは、ずっと洗脳されてきたんだ。良いと言われるものすべて、権威あるものすべては白く創られている。イエスの姿を見る、するとそこにはブロンドで青い目をした白人がいる、天使を見る、ブロンドで青い目だ。空の向こうに天国があるとして、黒人が死んで天国に召されたとき、黒人の天使はいったいどこに思う？ きっとそりゃ、キッチンだ。台所にいてミルクと蜜をつくらされているんだ。ミス・アメリカを見よう、白人だ。ミス・ワールドを見よう、白人だ。ミス・ユニバースは、白人だ。ターザン、ブラック・アフリカのジャングルの王だって、白人じゃないか。

このように、1960年以後のアリにとって、NOIの信仰体系は、人種主義的なアメリカで黒人の男として生きるひとつの大きな精神的な支柱となっていた。アリは、政治運動を始めたマルコム X と訣別し、彼と対立していたイライジャ・モハメドに従ったとして知られているが、おそらくそれはNOIの信仰の体系の方が、晩年のマルコム X の政治的アクション・プランよりも魅力的だったからであろう。NOIへの改宗を発表した席上で、アリとなる男は、「あんたたちの言うような人間に俺がなくなっちゃいけない必要なんてないだろ、誰になろうと俺の自由だ」と記者たちを喝破していたが、「自由」を求めるクレイ／アリにとってより重要だったのは、同胞の政治的な解放よりも、精神的なそれにあった。ハーワード大学のアリは、さらにこう続けている。

〔徴兵点呼の名を呼ばれたとき〕前に一歩踏み出なかったことで俺が多くのものを失ったと言っている者たちやメディア関係者にこう言いたい。俺は、いままさにこの瞬間まで、なにひとつ失っちゃいない。俺は多くのものを得たんだ。そのナンバーワン。精神（mind）の平和を得たこと。心（heart）の平和を得られたんだ¹⁶。

3. アリの「遺産」

筆者は、アリをもっぱら政治運動家のように解釈する見解は実証的に大きな問題があると考えている¹⁷。もちろん、徴兵拒否によって彼が支払った代償はきわめて大きなものであった。しかし、彼の徴兵拒否とベトナム反戦運動との関係はよく言ってシンボリックでエピソード的なものに留まり、アメリカ外交に関する彼の理解もまた素朴なもの域を出るものではない。また、ブラック・パワー運動との関係にしてみても、当時の運動の史料のなかでむしろ目立つのは、その知名度に反して、アリの直接的な関与の薄さである。ニューヨークのハーレム、カリフォルニア州オークランド、ニュージャージー州ニューアーク、ミシガン州デトロイト、ジョージア州アトランタと、1960年代から70年代初頭にかけて、ブラック・パワー運動の拠点となった場所がいくつかあるが、それらいずれにおいても、アリが継続的ななんらかのムーヴメントに関与したという形跡は、管見の限りでは、存在しない。

だがしかし、アリとブラック・パワー運動の直接の関係が薄いということで、彼の「遺産」が根拠の怪しいイメージだけにに基づいていたものであると結論することはできない。事態はむしろ逆である。本人の意図や行動によらず、黒人の男性の叛逆的イメージが、さまざまに解釈されるなかで拡散していったことこそが重要なのである。

1960年代後半から70年代前半は、全米の大学でスチューデント・パワーを求める運動が、ベトナム反戦やマイノリティのさまざまな「パワー運動」と同時に展開されたときであったが、これらの数々の運動の要求項目には、「モハメド・アリへのチャンピオンベルトの返還」が含まれていた。「アリ」は、これらの運動の紛れもないシンボルであった¹⁸。大仰な表現を敢えて用いれば、近代においてヘーゲルがナポレオンのなかに時代精神を見たように、「長い1960年代」を経験した青年たちはアリのなかにそれを見たのだ。それゆえ、その精神は、制度的な結実も得ることにもなる。

1967年4月、ハーワード大学で社会学を教えていたネイサン・ヘアは、ストライキ中のキャンパスにアリを招く。ヘアは、1960年代後半から1970年代初頭にかけて、ブラック・パワー運動の中心的知識人のひとりとして数々

の出来事に関与していた人物であり、そのひとつに、サンフランシスコ・ステイト大学の学生ストライキに端を発する大学改組がある。このストは、黒人学生組合（Black Student Union）と第三世界解放フロント（Third World Liberation Front）の呼びかけを発端とし、ベイ・エリアのブラック・コミュニティとアジア系アメリカ人コミュニティを巻き込みながら拡大して、1968年11月6日から翌年3月20日まで続いたものであった。この長い過程では、大学で行われている予備役将校訓練部隊（ROTC）の募集をキャンパス内で行い単位認定をすることの停止、マイノリティの教員の増加など、ベトナム反戦と数々の「パワー運動」の路線に沿ったさまざまな要求がなされていく。この大規模なストライキのなかで、ブラック・コミュニティを動員するにあたって重要な役割を果たしたのが、1966年より同地域で活動を始め、瞬く間に全米的な組織となっていたブラック・パンサー党であった¹⁹。やがて学生たちの要求は、エスニック・スタディーのためのカレッジ開設へと収斂していき、この要求に沿ったかたちで新カレッジの開設が決定され、同カレッジの下位部局であるブラック・スタディー学部プログラム・ディレクターの職に就いたのがヘアであった²⁰。このサンフランシスコ・ステイト大学の事例を嚆矢に、全米各地の大学で同様のプログラムが開設されるが、その後のアメリカ社会や文化の変容のなかで、このような教育研究機関が果たした大きな知的役割を否定する者はいないであろう²¹。

今日のアリのイメージ、グローバルなサポートを一身に集めて闘う黒人のイメージは、このときのクレイ／アリ個人の変化と、60年代後半のマルチエスニック・レイシャルな社会政治運動が合流したときに形成されている。クレイ／アリの変化、ブラック・パワー運動を経由したアメリカ社会の変化、このどちらかが欠けても、「アリ」は存在し得なかった。アリの妻のロニー・アリは、この「グレートな男」への弔辞のなかで、いみじくもこう述べている。

モハメドは、ルールが嫌いになったら、それを書き換えてしまいました。宗教、名前、信条、これらはみんな彼の好みにしたがって変えられたのです。その代償がどんなものであっても。彼の一連の行動のタイミングは、アメリカ全体での文化的な態度の巨大なシフトと同時進行だったのです²²。

4. おわりに～アリという謎

2017 年のアメリカ、バラク・オバマの大統領選初当選前後より喧伝された「ポスト人種」の神話は跡形もなく吹き飛んだ。「ブラック・ライヴズ・マター運動」に賛同する者たちがストリートを封鎖すれば、他方でアメリカ合衆国大統領の職には人種的・ジェンダー的な偏見を覆い隠そうともしない人物が座る。女性も史上最大規模のデモを行うなか、再びアメリカはアクティヴィズムの時代に入ろうとしている。アスリートたちも、2014 年頃から活発な政治的ステイトメントを発するようになった。ロサンゼルス・レイカーズの選手たちは、視聴者の多いシーズンプレーオフのゲームで、エリック・ガーナー絞殺抗議運動のスローガン “I Can’t Breath” と書かれた T シャツでアリーナに立ち、大きなアフロヘアが人目を惹く「黒人」クォーターバック（サンフランシスコ・フォーティナイナーズ）、コリン・キャパニックは、国歌斉唱のときに跪く抗議を開始した。その後キャパニックの動きには多くの同僚のフットボールプレーヤーたちが続き、ひとつの大きなムーブメントになっていった。これを快く思わない者も多く、キャパニックらの行為には、スタジアムで罵声を浴びせられる事態が続く。それでも跪くポーズを続けるキャパニックについて、「このような立場表明を見るのはモハメド・アリ以来だ」と評する者もある²³。ジム・ブラウン、カリーム＝アブドゥル・ジャバル、アーサー・アッシュなどの存在を考えると、このようなキャパニックへの評価はおそらく過大なものであろうが、政治社会問題とは距離をおくべしというアスリートに課された規範を徹底的に破壊し、その後の人びとが歩きやすいように道をならしたのはアリであろう。アリはまちがいなく彼らのロール・モデルである。

多文化主義的包摂性と保守的排他性とは、21 世紀初頭のアメリカにおいて、激しい対立を繰り広げながらも併存が続けている。興味深いことに、アリの死去が伝えられた直後の報道の多くは、クレイの「オール・アメリカン・ボーイ」的な側面を捨象して、クレイ／アリの「偉業」を伝えることに終始していた。また、「アリ」が象徴するものに激しく反撥したアメリカ社会への言及はきわめて少なく、彼の政治姿勢に対する「弾圧」の描き方は、最終

的に訪れる「解放 Redemption」を劇的にするための前段のような扱い方に留まった。だがしかし、本稿が見てきたように、歴史のなかのクレイ／アリはもっと複雑な「ライフ」を持っていたのである。

ロニー・アリが述べているように、モハメド・アリが支払った代償は大きい。ボクサーとして最良の3年半を、徴兵拒否を原因としたボクシング・ライセンス剥奪で「無駄」にしたのだ。そして、その闘いは厳しかった。こだわり続けた名前にしてみても、決してすぐに広まったわけではない。今日、60年代当時の彼のことを調べようと新聞社のデータベースで“Muhammad Ali”と入力しても無駄である。人好きのする青年クレイの突如の変貌は、アメリカの公衆にとっては裏切り行為に等しいものであり、ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストなど、「メディアのエスタブリッシュメント」は、本人の抗議にも関わらず、クレイという名前を使い続けていたからだ。

もちろんこのような「アリ」への嫌悪は、改名それ自体が問題ではない。アリも当然それを察知しており、このように述べている。

俺の人生のなかでいちばんでかい出来事は自分の名前を変えたことだ。奴隷主から俺の家族に与えられたアイデンティティから俺は解放されたんだ。人は名前を変える。男優や女優は名前を変えている。ローマ法王だって違う名前だ。ジョー・レイスにしてもシュガー・レイにしても本名じゃない。もし俺がカシアス・クレイから、スミスだとかジョーンズだとか、白人がアメリカ人ばいと思う名前に変えたなら、誰も文句なんか言わなかったんじゃないか。イライジャ・モハメドはほんとうに美しい名前を俺にくれたんだ。それをとても光栄に思っている²⁴。

「アリ」という表記は、改名の公表からかなりの時間が経って徴兵拒否に関する裁判で彼の無罪が確定した後、1970年以後のことだった。なお、ニューヨーク・タイムズの方針は、「法的に改名したわけではない」のだから「アリ」とする必要はない、というものだった。しかし、同紙の記者であるリップサイトも認めているように、ジョン・ウェインやロック・ハドソンの法的な名前を確認することはなく、「白」か「黒」かで、あきらかにダブル・スタンダードが存在していたのである²⁵。ロニー・アリが述べる「文化的な態度の巨大なシフト」は、決して簡単に起きたものではなく、クレイがアリ

になったとき、このシフト——「黒」が認知される大きなシフト——を予見することは無理だったはずだ。そこには己の信念に忠実に生きる妥協を知らない人間の美が確かに存在する。

だが、アリを強い人種の矜持を持った「レイス・マン」として描くことは、彼を「運動家」として描くことと同じく、きわめて大きな問題がある。実のところ、「レイス・マン」としてのアリの行動もまた、矛盾に充ち満ちたものであった。

クレイ／アリの狂詩のなかに、奴隷制とジム・クロウの下で培われた「ダズンズ」に似た西アフリカ伝来の言語的戯譚を、そしてその後のラップの先駆の姿を見つけるのは容易である。ザイールの首都キンシャサでの伝説に残る劇的なリングでの勝利、徴兵拒否で見せた揺るがない叛逆精神とともに、クレイ／アリの「大口叩き」は、パーキンソニズムで発話が困難になるまで、彼の大きな魅力のひとつであった。巨大な社会政治的な力に抗い「アフリカ文化」を守るアリというイメージがここに生まれることになる。

しかし、対戦相手を罵るアリの言葉は、厳密にいうと、「黒人文化の伝統」から大きく逸脱したものであった。まず、ダズンズとは、言葉の応酬を通じて、言語的技能を競う「コンテスト」であり、それが競い合いであるからには、ひとつのゲームであるという了解のもとでの複雑なルールがある。文化史家のローレンス・レヴィーンの見立てによると、人種間の「エチケット」の小さな逸脱が死に直結する奴隷制とジム・クロウ制度の下、ダズンズのルールに従う規律を身につけることは、「感情や憤怒を制御」することを学ぶ社会的機能をもっていた。敵対的な人種環境のなかで育まれたダズンズには、アフリカ系に人間性を認めない人種主義的規範に抗う機能も備わり、相手を痛罵するにしても、野獣化する言葉を用いるのは禁じ手であった²⁶。要は、ダズンズでは、言って良いことと悪いことがあり、感情は制御されねばならないのである。

だが、アリは、寡黙な相手を前に、感情も露わに言葉を一方的に浴びせかけた。ソニー・リストンは「のろまで醜い熊」、フロイド・パタソンは「臆病なウサギ」と動物に擬することに躊躇する素振りも見せなかった。ボクシング史上に残る3度の名対戦を行ったジョー・フレイジャーに対しては、

「ゴリラ」と人間以下の霊長類の名で呼ぶことすら行っていた。このような「非礼」もあって、アリとフレイジャーの「因縁」はことさら深い。アリの徴兵拒否に対する有罪判決を無効とする最高裁判決が下された直後、つまりアリの叛逆が司法上の勝利を収めた直後の対戦の際、彼は、フレイジャーを「ホワイト・エスタブリッシュメントのマヌケな手先」と呼ぶ一方、自分自身のことは、ゲトーに生きる社会的敗者のための闘士——アリ曰く「同胞の98%は俺の味方」——として描きあげた。しかし、実のところ、「苦労人」はむしろフレイジャーの方であった。ケンタッキー州の農場を買い上げてトレーニングしていたアリと異なり、フレイジャーは、フィラデルフィアの黒人ゲトー、ノース・フィリーに住み、その上、肌の「黒さ」はアリより明らかに濃かったのである²⁷。言葉の応酬ではアリに勝ち目のないフレイジャーは、その後、周囲の者に「あいつがいったいゲトーの何を知ってるというんだ」と漏らしたという²⁸。白人のオーディエンスを前に、アリほど激しく「同胞の黒人」をレイシストの言葉で罵りあげた著名な黒人を筆者は知らない。

実のところ、アリの言葉のシアトリックスは、プロレスからも影響を受けたものであった²⁹。つまり、それは、ダズンズの「鬼子」だというよりほかなく、もっぱら「黒人文化が育んだもの」と考えることはできないのである。

このように考えると、「アリ」とは謎だらけの黒い存在である。政治的コミットメントが史実としてあやふやであれば、アリの言葉も、ドナルド・J・トランプの暴言が「アメリカの偉大さ」とは無縁のように、「黒人の誇り」と本質的に深い関係はない。

だとすると、どうやらわれわれは、「アリ」とは、ストリートでの、そしてラリーの演壇での、リング・サイドでの、ひとつの重要な記号であったと考えるよりほかないようだ。彼の「グレートな黒い肉体」は人びとがいろいろな意味を賦活していった場だったのである。

そのアリはリステン戦直後に極めて意味深なことを言っていた。当時は「黒人至上主義のヘイトグループ」と形容されることも多かったNOIとの関係を問われ、似た者同士が集まって住むのが自然の法則だとして分離主義を擁護したあと、こう述べていたのである。

俺は毎日電話をもらっているよ。俺にブラカードを持って欲しいんだ。ピケに加わって欲しいんだ。俺が白人と結婚するとなんてすばらしいんだ、それが友愛というものだ、なんて言ってね。俺は爆弾で吹っ飛ばされたくない。放水浴びて下水道に突き落とされたくない。同胞と一緒にいて幸せに暮らしたいんだ³⁰。

またもや「レイス・マン」のアリとは別人のような発言である。だがしかし、ベトナム反戦に足を踏み入れた最初のことば——俺はベトコンに文句なんかない——が、徴兵等級が上がったことに対して記者からしつこく意見を訊かれて咄嗟に出たことを考慮するならば³¹、奇妙な一本の太い芯が通っていることがわかる。その芯とは、つまり、己が信じることにのみに従う、ということである。「あんたたちの言うような人間に俺がならなくちゃいけない必要なんてないだろ」とアリが言い放っていたのは、この直前のことだった。

だが、公民権運動／ブラック・パワー運動時代のアフリカン・アメリカンにとって、自己を確定すること自体がきわめて難しいことであった。ここに時代に特有の、そしてアフリカン・アメリカンに特有の困難さがあった。「俺の自由」など、存在していなかったのだ。これより2年前、黒人作家のジェイムズ・ボールドウィン、イライジャ・モハメドとのインタビューを素材にしたエッセイのなかで、こう述べている。

いかなるものであろうとも、天空に大変動が起きることは恐ろしいことだ。なぜならば、それは、人間のリアルな感覚を激しく揺さぶるからである。さて、白人男性の世界のなかで、黒人男性はひとつの恒星、動かぬ支柱の役目を果たしてきた。いま黒人男性は自分の場から動きだそうとしている。天と地がその根底から揺れ動き始めたのだ³²。

クレイ／アリの行動・言動は、60年代半ばに動き始めた黒人男性の太い軌跡と見なすことができる。両義的な「謎」を凝縮した彼の「黒い身体」は、実のところ、黒人男性の両義性そのものであった。ならば、アリは、彼の本質を捕まえようとする手を、蝶のように舞ってかわし、蜂のように刺してやるだろう。

だが、アリがもっぱら黒人運動家・反戦運動家・人種主義者と描かれたとき、クレイ／アリが持っていた複雑性や両義性は完全に消えていった。2016年、半世紀前に動き出した「恒星」のなかでもひとときわ激しく動いた星が、その「運動」を終えたかのようだ。われわれは、時代のひとつの転換点にいるのかもしれない³³。

本稿は、2016年11月26日に立教大学池袋キャンパスで行われた、立教大学アメリカ研究所主催の第8回「アメリカの社会とポピュラーカルチャー」研究会「モハメド・アリとは誰か——「アメリカン・レジェンド」の虚実」での報告に基づいている。筆者がしばらく離れていたテーマであったが、これを機会にもういちど考えをまとめることができた。企画と運営にあたられた立教大学アメリカ研究所の方々、当日にご参加頂いた方々に改めて感謝したい。なお、当日の討論では示唆に富む意見を多く頂戴した。それを本稿に活かすことができなかったとすれば、それは偏に筆者の責である。

註

¹ Belson [2016]

² 広く知られているように、モハメド・アリにとって、名前は最も重要な何かであった。彼の生涯をたどることを目的とする本稿では、彼が生きた時代の文脈を明らかにするために、基本的には改名する前は「カシアス・クレイ」、その後は「モハメド・アリ」を使用している。また、文脈上並記することでより時代の文脈が浮き上がると判断した場合には、「クレイ／アリ」という表現も用いている。

³ Lipsyte [2016]

⁴ Carson [1981]; Bates [1987]

⁵ Borstelmann [2001]; Dudziak [2000]; Plummer [1996]

⁶ Olsen [1967: 86]

⁷ Von Eschen [2004]

⁸ Ali [1975: 70]; Hauser [1991: 29]

⁹ このルイヴィルに「凱旋」した直後のクレイについて、その後様々な場で語られることになるひとつの「事件」がある。ルイヴィルは南部ケンタッキーに位置し、クレイはジム・クロウ制度の下で育った。五輪の祝勝会が行われた後、地元のレストランに入ったのだが、黒人であるからとサービスを拒否され、その怒りから金メダルをオハイオ川に投げ棄てたというものである。こ

のストーリーは、アリの自伝 *The Greatest* で最初に記されたのだったが、その後のアトランタ五輪での再授与式、そして映画『アリ』での劇的な演出を経て、今日ではひとつの「伝説」となっている。ところが、その後もクレイが金メダルを持っているところを目撃している証言は多くあり、プロボクグラフィーを用いてアリの伝記を著したトマス・ハウザーは、明確にこの「事件」の事実性を否定している。

10. ボクシングというスポーツ競技における「人種」、そしてこの時期におけるクレイ／アリの人種的な表象の変化については、藤永 [2011] を参照。

11. Casstevens [1967]; Ralph [1993]

12. 藤永 [2011]

13. ブラック・パワー運動については、藤永 [2012] および藤永 [2014] を参照。

14. ブラック・パワー運動の概史として、Joseph [2006a] を参照。

15. 60年代の政治社会運動については、西田・梅崎 [2015]; 油井 [2012] を参照。

16. このときの模様は、評価が極めて高いドキュメンタリー『勝利を見据えて *Eyes On the Prize*』に収録されている。ドキュメンタリーの筆記録については以下を参照。Public Broadcasting System Website [n.d.]

17. なお、筆者は、同様の見解を以下のインタビュー記事でも述べている。同じくアリを語る他の識者の方の見解と参考までに比較されたし。「(耕論) 蝶と風と、壁と」『朝日新聞』2016年12月23日

18. Van Deburg [1992: 85-88]

19. 同党の特徴は、覚醒した黒人の人種意識に拠りつつも決して分離主義には傾斜せず、マイノリティ集団とラディカル左派の広範囲な共闘を実現した点に最大の特徴があり、日系アメリカ人は結党当初から中核メンバーであった。Seale [1970: 79-81]; Fujino [2012]

20. Van Deburg [1992: 167, 214-215]。ヘアは、その後、ラディカルな黒人組織を糾合する動き、Black Convention Movement の中心人物となる。ヘアについては、Joseph [2006b: 264-265]; Chrisman and Hare [1973]

21. およそ10年前の資料になるが、2007年の時点で、アフリカン・アメリカン・スタディーズとそれに類する学位が取れる課程は、全米でおよそ300にのぼり、そのうち、ハーヴァード大学、イェール大学、テンブル大学などの9校が博士課程までのプログラムを持っている。Alkalimat [2007]

22. *New York Times on the Web* [2016]

23. たとえば以下を参照。Callahan [2016]

24. Hauser [1991: 102]

25. Mather [2016]

²⁶. Levine [1977: 344-358] .

²⁷. Marqusee [1999: 258-259]

²⁸. Hauser [1991: 219]

²⁹. Marqusee [1999: 49-50]

³⁰. *New York Times* [1964]

³¹. Lipsyte [1964]

³². Baldwin [1962: 9]

³³. 多文化主義的感性への反撥がひとつの原因で、「トランプ大統領」の誕生を見た 2017 年、果たして 60 年代以来半世紀のアメリカ社会の変化の深度がどれほどのものだったのか、これはもちろん真剣に検討する必要があるだろう。しかし、この小論で、この大きな問題を考察することはとても無理であった。今後の課題としたい。

参考文献

Ali, Muhammad. *The Greatest: My Own Story*. New York: Random House, 1975.

Alkalimat, Abdul. *Africana Studies in the US*. March 2007, eblackstudies.org.

<<http://ebblackstudies.org/su/complete.pdf>> [Last accessed, February 7, 2017]

Baldwin, James. *The Fire Next Time*. New York: Vintage, 1962.

Bates, Daisy. *The Long Shadow of Little Rock: A Memoir*. Fayetteville, Ark.: University of Arkansas Press, 1987.

Belson, Ken. "Prayer Service for Muhammad Ali Draws Thousands to Hometown Area," *New York Times on the Web*, 9 June, 2016.

<https://www.nytimes.com/2016/06/10/sports/muhammad-ali-prayer-service-louisville-kentucky.html?_r=0> [Last accessed, 7 February, 2017]

Borstelmann, Thomas. *The Cold War and the Color Line: American Race Relations in the Global Arena*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 2001.

Callahan, Yesha. "Common on Colin Kaepernick: 'I Haven't Seen an Athlete Take That Type of Stand Since Muhammad Ali,'" *The Root*, September 29, 2016.

<<http://thegrapevine.theroot.com/common-on-colin-kaepernick-i-havent-seen-an-athlete-ta-1790889041>> [Last accessed, February 7, 2017]

Carson, Clayborne. *In Struggle: SNCC and the Black Awakening of the 1960s*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1981.

Casstevens, Thomas W. *Politics, Housing and Race Relations: California's Rumford Act and Proposition 14*. Berkeley: Institute of Governmental Studies, University of California, 1967.

- Chrisman, Robert and Nathan Hare, eds. *Contemporary Black Thought: The Best from the Black Scholar*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1973.
- Cottrell, John. *Muhammad Ali: Who Once Was Cassius Clay*. New York: Funk & Wagnalls, 1967.
- Dudziak, Mary L. *Cold War Civil Rights: Race and the Image of American Democracy*. Princeton: Princeton University Press, 2000.
- Early, Gerald, ed. *The Muhammad Ali Reader*. New York: Rob Weisbach Books, 1998.
- 藤永康政「モハメド・アリの「誕生」——人種の表象が変化する瞬間の一考察」真島一郎編『二〇世紀〈アフリカ〉の個体形成——南北アメリカ・カリブ・アフリカからの問い』平凡社, 2011年, 596-617頁.
- 「ブラック・パワーの挑戦とアメリカン・リベラリズムの危機——デトロイトの黒人ラディカルズとニュー・デトロイト委員会の活動を中心に」『アメリカ史研究』第35号, 2012年, 40-58頁.
- 「What's Love Got to Do with It?——公民権運動の記憶とブラック・パワー」『立教アメリカン・スタディーズ』第36号, 2014年, 7-37頁.
- Fujino, Diane C. *Samurai among Panthers: Richard Aoki on Race, Resistance, and a Paradoxical Life*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2012.
- Hauser, Thomas. *Muhammad Ali: His Life and Times*. New York: Touchstone, 1991.
- Joseph, Peniel E. *Waiting 'til the Midnight Hour: A Narrative History of Black Power in America*. New York: Henry Holt, 2006a.
- . "Black Studies, Student Activism, and the Black Power Movement," *The Black Power Movement: Rethinking the Civil Rights-Black Power Era*. Ed. Peniel E. Joseph. New York: Routledge, 2006b. pp.251-277.
- Levine, Lawrence W. *Black Culture and Black Consciousness: Afro-American Folk Thought from Slavery to Freedom*. New York: Oxford University Press, 1977.
- Lipsyte, Robert. "Clay Discuss His Future, Liston and Black Muslims," *New York Times*, 27 Feb, 1964.
- . *Free To Be Muhammad Ali*. New York: Harper & Row, 1977.
- . "Muhammad Ali Dies at 74: Titan of Boxing and the 20th Century," *New York Times on the Web*, 4 June, 2016.
<https://www.nytimes.com/2016/06/04/sports/muhammad-ali-dies.html> [Last accessed, 7 February, 2017]
- Marable, Manning. *Malcolm X: A Life of Reinvention*. New York: Viking, 2011.
- Marqusee, Mike. *Redemption Song: Muhammad Ali and the Spirit of the Sixties*. London: Verso, 1999.
『モハメド・アリとその時代——グローバル・ヒーローの肖像』藤永康政訳, 未來社, 2001年.
- Mather, Victor. "In the Ring He Was Ali, but in the Newspaper He Was Still Clay," *New York Times on the Web*, 10 June, 2016.
<https://www.nytimes.com/2016/06/10/sports/muhammad-ali-name-cassius-clay-newspapers.html> [Last accessed, 7 February, 2017]
- Meriwether, James H. *Proudly We Can Be Africans: Black Americans and Africa, 1935-1961*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2002.

- Muhammad, Elijah. *Message to the Blackman in America*. Atlanta: Messenger Elijah Muhammad Propagation Society, 1965.
- New York Times*. "Clay Say He Has Adopted Islam Religion and Regards It as a Way to Peace," 28 February, 1964.
- New York Times on the Web*. "In Their Own Words: Eulogies for Muhammad Ali," 10 June, 2016.
<<https://www.nytimes.com/2016/06/11/sports/lonnie-billy-crystal-bill-clinton-eulogies-for-muhammad-ali.html>> [Last accessed, 7 February, 2017]
- 西田慎・梅崎透編『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」——世界が揺れた転換点』ミネルヴァ書房, 2015年.
- Olsen, Jack. *Black Is Best: The Riddle of Cassius Clay*. New York: G. P. Putnam's Sons, 1967.
- Plummer, Brenda Gayle. *Rising Wind: Black Americans and U.S. Foreign Affairs, 1935-1960*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996.
- Public Broadcasting System Website. *Eyes on the Prize: America's Civil Rights Movement, 1954-85, "Ain't Gonna Shuffle No More (1964-1968)."*
<http://www.pbs.org/wgbh/amex/eyesontheprize/about/pt_205.html> [Last accessed, 7 February, 2017]
- Ralph, James R. *Northern Protest: Martin Luther King, Jr., Chicago, and the Civil Rights Movement*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1993.
- Seale, Bobby. *Seize the Time: The Story of the Black Panther Party and Huey P. Newton*. New York: Random House, 1970.
- Torres, José. *Sting Like a Bee: The Muhammad Ali Story*. New York: Abelard-Schuman, 1971.
- Van Deburg, William L. *New Day in Babylon: The Black Power Movement and American Culture, 1965-1975*. Chicago: University of Chicago Press, 1992.
- Von Eschen, Penny M. *Satchmo Blows Up the World: Jazz Ambassadors Play the Cold War*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2004.
- X, Malcolm with the assistance of Alex Haley. *The Autobiography of Malcolm X*. New York: Penguin, 1965.
- 油井大三郎編『越境する1960年代——米国・日本・西欧の国際比較』彩流社, 2012年.